

## 1. 世代構成が儀礼文化に与える影響に関する研究

### －「ぼっち」はどのような儀礼を行っているか、いないか－

石井 研士

はじめに

儀礼は、基本的に家族や集落など集団で行われるもので、個人で行う儀礼ですら、集団性を背景や前提にして行われているといい。極端な例であるが、無人島に一人では成人式も還暦も、正月やクリスマスも無関係である。それでも行うとすれば、それはたんなる思い出や追憶で、特段の意味を持たない。

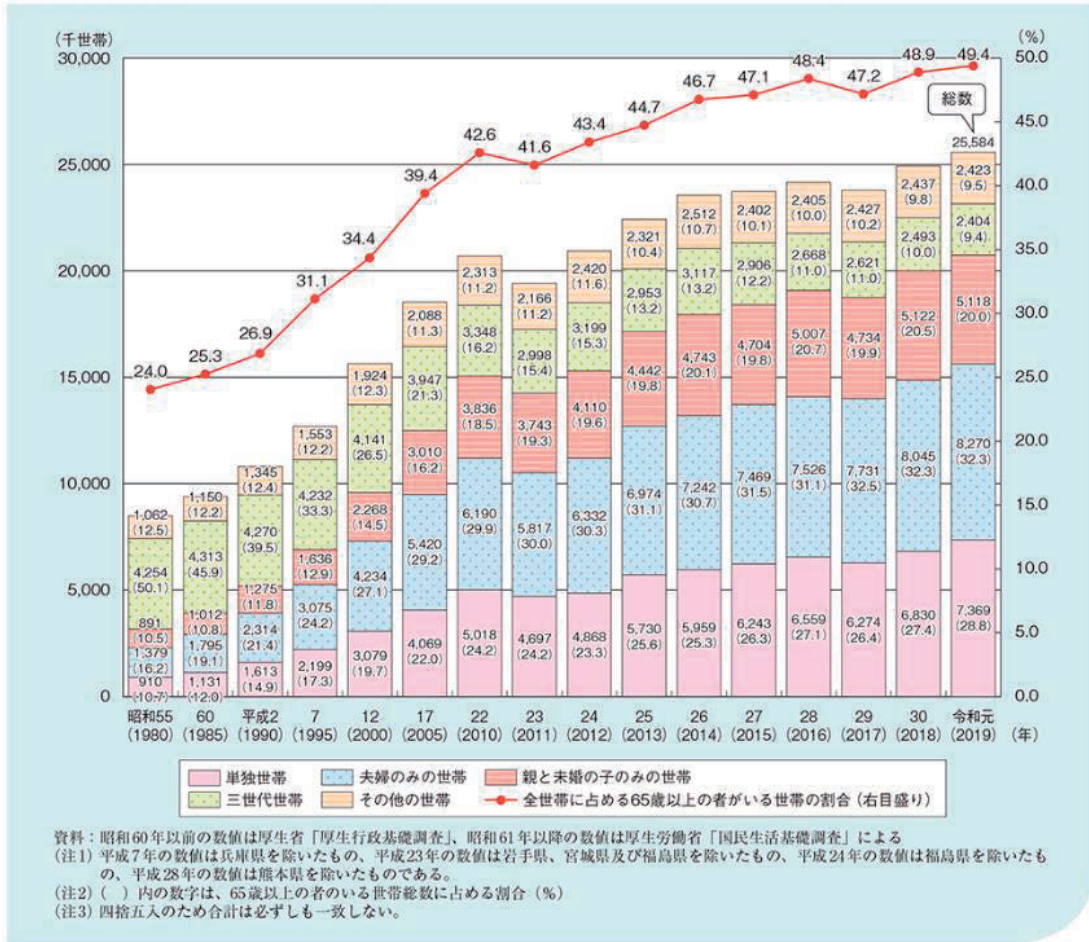
儀礼を行う母体である家族の問題に入る前に、「家」そのものに宗教性が認められるという指摘を確認しておきたい。民俗学者の竹田聰洲は次のように指摘している。

「家」は各世代を貫く一種の自己同一性の観念を以て、過去から不断に連続してきた直系の系譜体・・・家永続の此要請・規範は、家その創設以来現在まで持ち伝えた先祖・列祖に対する至上の崇敬と表裏一体となっている。家の幸福と存続を念とする先祖の存在は、現代の家族にとって家の存在と同じ程度に自明のことであり、家永続の規範は、この先祖の祭を絶やさないと同時に集中的に現れる。この意味において、家は必然的に一定の宗教性を内在させる。（竹田聰洲『日本人の「家」と宗教』評論社、1976年）

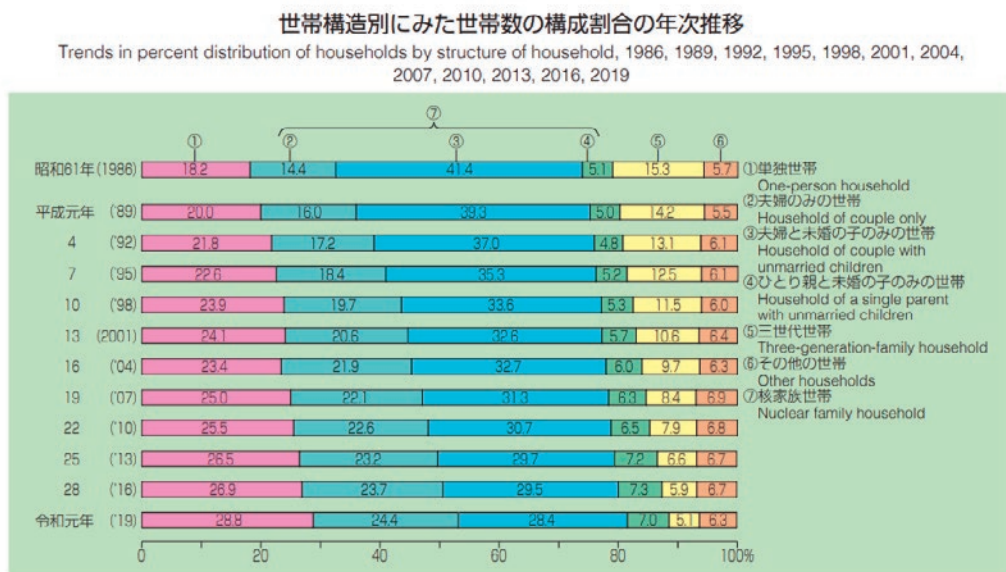
祖先崇拜に基づく「家」を表象する三世代の家族を理想とする風潮は、まだ現代社会においても残っているように思う。つまり祖父母と同居する息子世帯、そして息子世帯の子どもからなる「家」である。たとえば1946年に新聞紙上に掲載が始まり、1969年にテレビ放送が開始されて以来、作者没後も続いている「サザエさん」は三世代同居家族である。

しかしながら、戦後の世帯構成の変化を見ると、こうした「家」は見事に解体したことが分かってくる。図表1は、65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者のいる世帯の割合を図示したものである。65歳以上の者のいる世帯は全世帯（5,178万5千世帯）の49.4%を占めている。令和元年の資料なので、令和5年の現在はさらに高齢化が進んだことになる。問題はその構成で、昭和55年では世帯構造の中で三世代世帯の割合が一番多い。65歳以上のいない世帯では親と子からなる核家族が多いが、高齢者のいる家族に限定すると三世代世帯がまだ多かったことになる。しかし、令和元年になると、夫婦のみの世帯が一番多く約3割を占めている。そして令和5年現在、高齢者のいる世帯でもっとも多いのは単独世帯である。

図表1 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合（『令和3年版高齢社会白書』内閣府）



図表2 世帯構造別にみた世帯数の構成割合の年次推移（『令和3年国民生活基礎調査（令和元年）の結果から グラフでみる世帯の状況』厚生労働省政策統括官、令和3年）



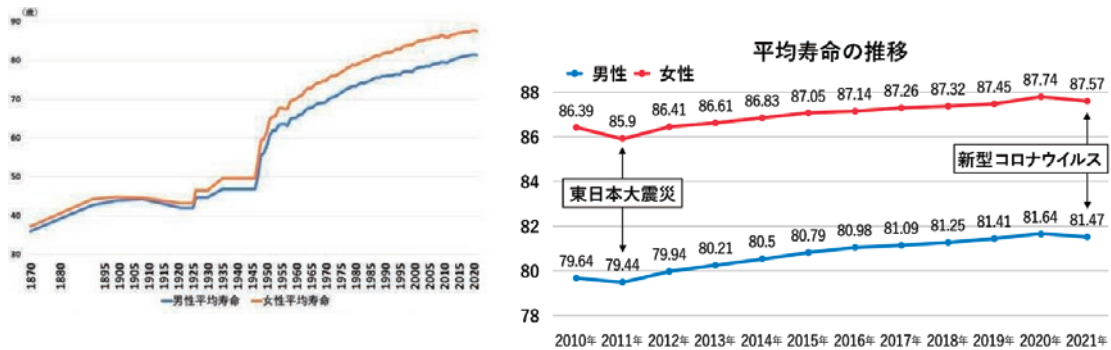
図表2は、世帯構造別にみた世帯数の構成割合の年次推移で、高齢者がいるかどうかは別にした全世帯の構成である。構成の説明を詳細に行うために二枚の図表を用意したわけではない。これまで地域共同体に位置する「家」と構成員としての個人に焦点を当てて通過儀礼や年中行事の研究が行われてきたが、戦後になって家族構造は大きく変化したのであり、伝統的な通過儀礼や年中行事の分析はもはや有用でなくなっていることが理解できる。図表1で示された家族のヴァリエーション、「単独世帯」「夫婦のみの世帯」「親と未婚の子のみの世帯」「三世帯世帯」によって儀礼文化の継承維持はまったく異なってくる。

本論が目的とするのは「単独世帯」の儀礼文化の現状把握である。本論の冒頭で述べたように、儀礼は基本的に集団性を背景に実施されるもので、たとえ個人が行うとしても副次的なものにすぎない。単身者がどのような儀礼を行っているかが問題となる。

「単独世帯」という場合に、大きく二種類を想定しなければならない。ひとつは、図表1で見てきたような高齢者の場合である。現在の高齢者は、まだ皆婚主義が十分に機能していた時代の人々であり、「単独世帯」は女性が圧倒的に多いに違いない。図表3は平均寿命の推移であるが、男性と女性に6歳以上の差が見られる。高齢者の「単独の世帯」の男女比が不明であるが、明らかに女性が多いと想定してよいと考える。

1870年代からの平均寿命と近年のデータが記入されているデータを併せて示すと以下のようなになる。

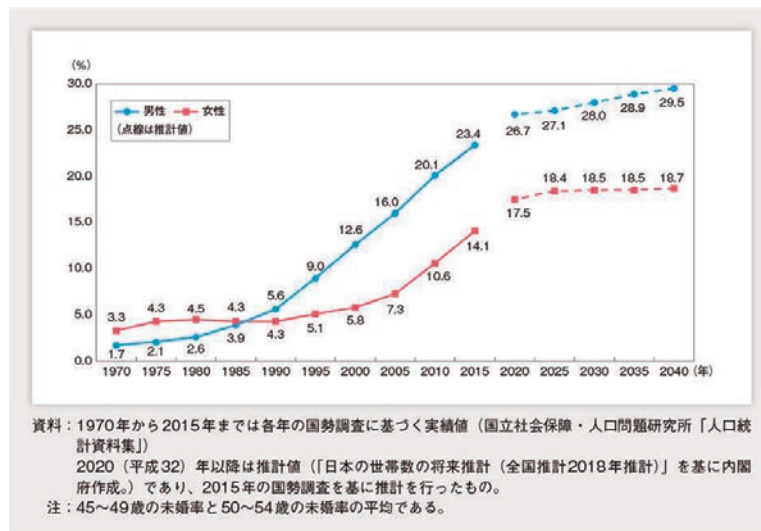
図表3 平均寿命の推移 (左：厚生労働省「簡易生命表」、右：Shiseidoが厚生労働省「簡易生命表」をもとに作成)



「単独世帯」のもうひとつのパターンは若年の未婚者である。図表4はいわゆる生涯未婚率といわれるもので、50歳時の未婚割合の推移と将来予測を示した図である。男性の上昇が強く、このままだと2040年頃には30%を超える。厚生労働省「令和2年(2020)人口動態統計(確定数)の概況」によれば、令和元年の男性初婚年齢は31.2歳、女性は29.6歳である。

世代別での未婚率は国勢調査(2020年実施)によると、男性の25~29歳で76.4%、女性の25~29歳で65.8%と20代での既婚者はわずかである。男性の30~34歳になると51.8%、女性の30~34歳で38.5%と、女性ではようやく未婚率が5割を切る。さらに男性の35~39歳では38.5%、女性の35~39歳で26.2%となる。

図表4 50歳時の未婚割合の推移と将来予測（内閣府「平成30年版少子高齢化対策白書」）

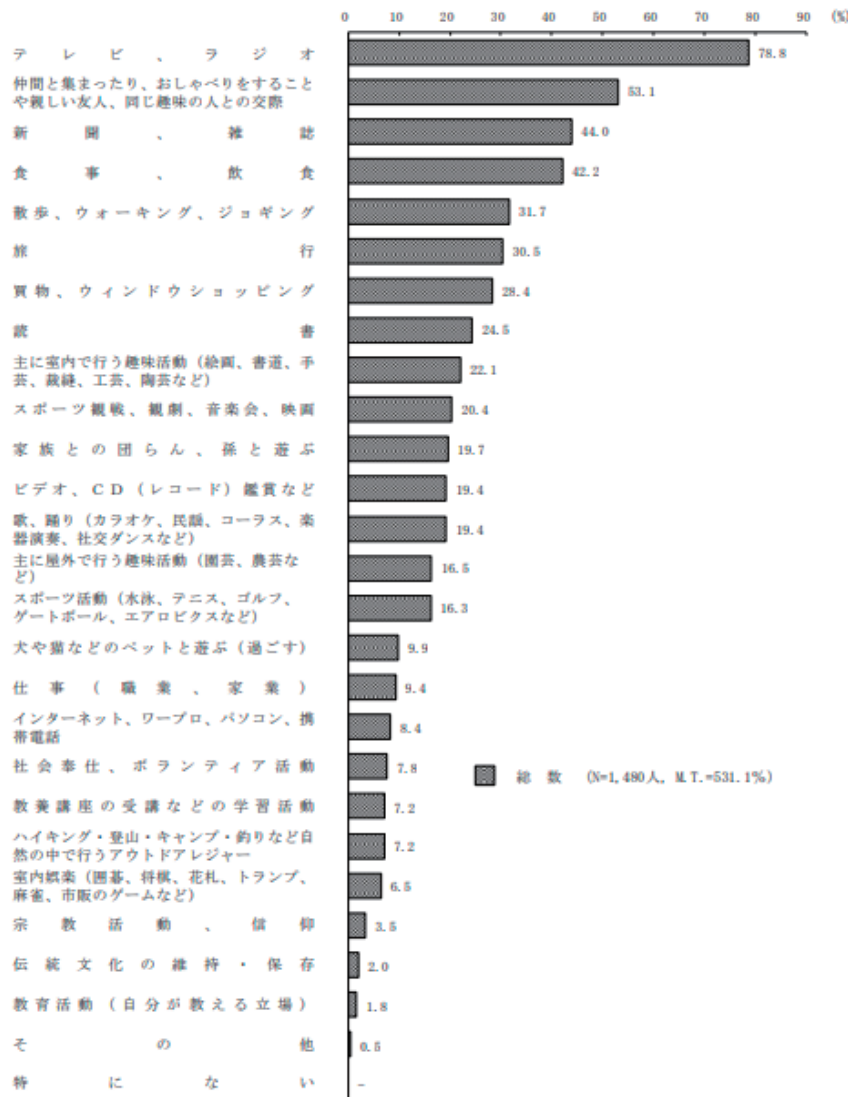


私が家族の構造に言及してきたのは、議論を進めるために二つの確認が必要だったからである。ひとつは、伝統的な家族は壊れており、そうしたものを母体にして成立してきた儀礼文化は今度急速に変化していくだろう、という点である。第二は、今後増加していくことが明らかな「単独世帯」つまり、単身者がどのような儀礼文化を行っているか、あるいは行っていないかを把握する必要があるということである。単身者はおおよそ、高齢者と若年の未婚者である。

#### 実体調査はあるのか

単身者に関する調査は存在する。未婚の単身者や高齢の単身者を対象にした調査である。しかしながら残念なことに、多少なりとも儀礼文化に焦点を当てた調査は存在しなかった。たとえば総務省が平成26年に実施した「平成26年度 一人暮らし高齢者に関する意識調査」には「楽しみにする事項」という項目が設けられている。「Q18最後の質問です。あなたは、普段の生活でどのようなことを楽しみにしていますか。」という質問であり、こうしたなかに儀礼文化に関わる事例が含まれていることが期待された。回答はマルチアンサーとなっている。「伝統文化の維持・保存」が多少近いのだろうか。しかしながら調査結果は数パーセントである。

図表5 現在の楽しみ（「平成26年度 一人暮らし高齢者に関する意識調査」）



#### 年齢別調査から

「単身者」の儀礼文化の実体を調査した事例はなさそうである。また同様に、未婚者のものも見当たらない。そこで、年齢別の単身者の割合を考慮して、年齢別に結果が示されている調査から、単身者の儀礼文化への関わりを把握したいと思う。

参考する調査は、宮木由貴子「交流機会としての年中行事・イベント実施—子どもの有無や年代で異なる20～40代の実施状況—」、博報堂「生活定点1922-2022」、インタビューアード「「季節行事・年中行事」に関するアンケート」の三つである。

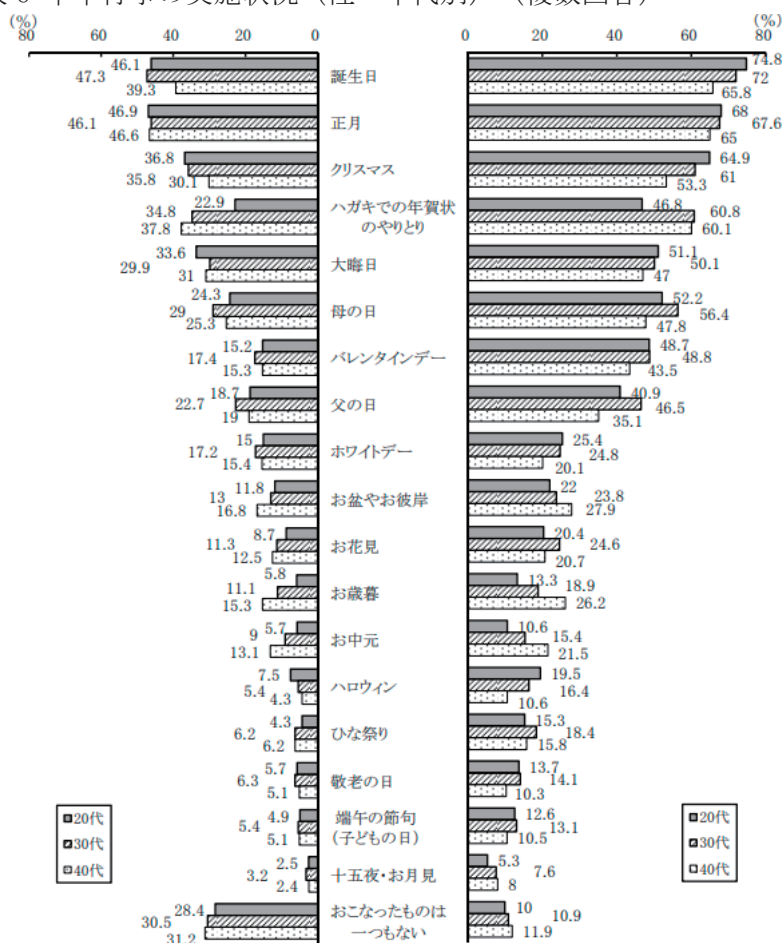
#### 1) 「交流機会としての年中行事・イベント実施—子どもの有無や年代で異なる20～40代の実施状況—」

調査者の宮木由貴子は第一生命経済研究所・ライフデザイン研究本部の首席研究員であ

る。年間、かなりの数の調査報告書を執筆しているが、とくに儀礼文化や年中行事に関する調査を繰り返してきたわけではない。資料の出典元として、「若者の価値観と消費行動に関する調査」と記されているが、同名の調査報告は見られない。全体として実施した調査をテーマ別にして公表したものと思われる。

調査は、2017年2月に全国の20～49歳の12,466人に実施したものであるが、報告書はわずかに6頁である。インターネット調査で、「全国」と記されているが、母集団がどのような属性なのか、あるいは回答率といった基本項目は記されていない。

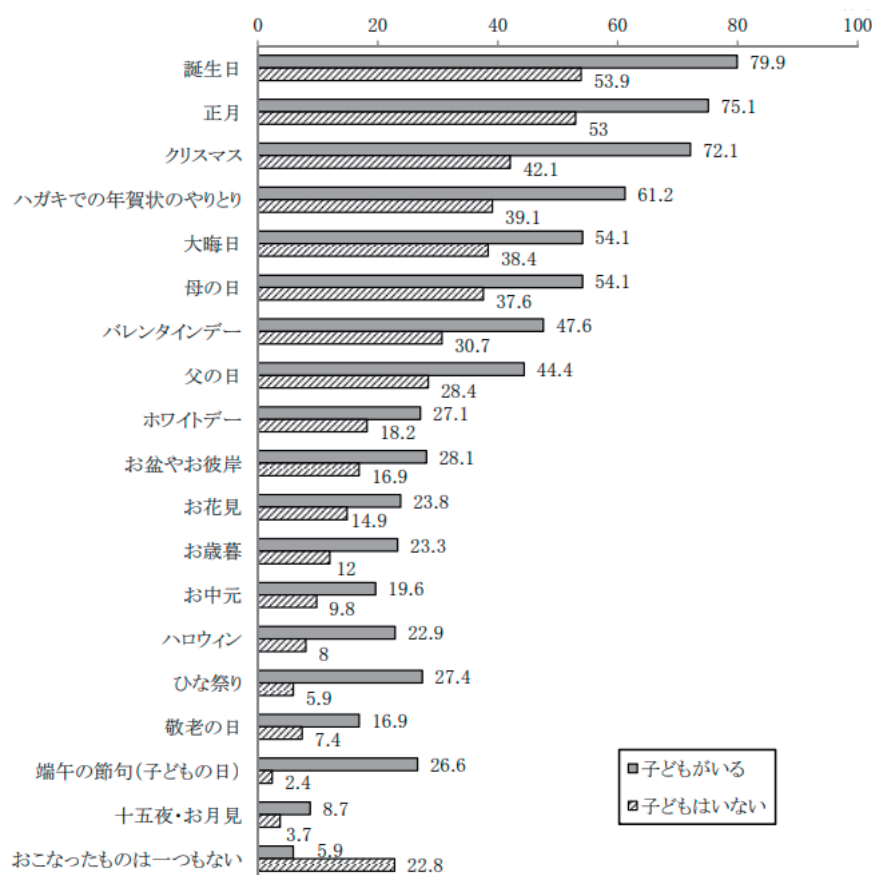
図表6 年中行事の実施状況（性・年代別）（複数回答）



図表の右側のグラフが女性、左側が男性の調査結果となっている。20代から40代の年代別すべてにおいて、男性より女性で実施率が高い。実施率の差はかなりである。実施率の高い「誕生日」「正月」「クリスマス」「大晦日」では、「ハガキはがきでの年賀状のやりとり」を除くと、20代がもっとも高く、年代の上昇とともに実施率は低下する。

「母の日」「父の日」は30代でもっとも高いが、結婚する者も増え、両親に対する感謝が増すのかもしれない。「ハガキはがきでの年賀状のやりとり」「お歳暮」といった社会慣習は、社会的地位が確立する40代が多いのは理解できる。同様に「お盆やお彼岸」は、家長となった年長者を中心に行われるもので、そうした意味では若年層は低くなる。

図表 7 年中行事の実施状況（子どもの有無別）



図表 7 は年中行事の実施状況を子どもの有無別で表したものである。残念ながら、年代別や世代構成別の資料は記載されておらず、高齢者と若年層に限定して「子どもの有無」を考察できない。それにしても、明確な傾向を読み取ることは可能である。子どもがいないと、行事の実施率は大きく減退するのである。

## 2) 博報堂「生活定点 1922-2022」

博報堂の「生活定点」調査はホームページで公開されている。地域を首都 40km 圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県）と阪神 30km 圏（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県）に限定し、訪問留置法によって、20 歳～69 歳の男女を対象に調査をしたものである。調査人数は 3 千人ほどで、2022 年は 3,084 人だった。2020 年国勢調査に基づく人口構成比（性年代 5 歳刻み）で割付されているなど、都市文化を中心とするが、信頼性の高い調査と考えていい。

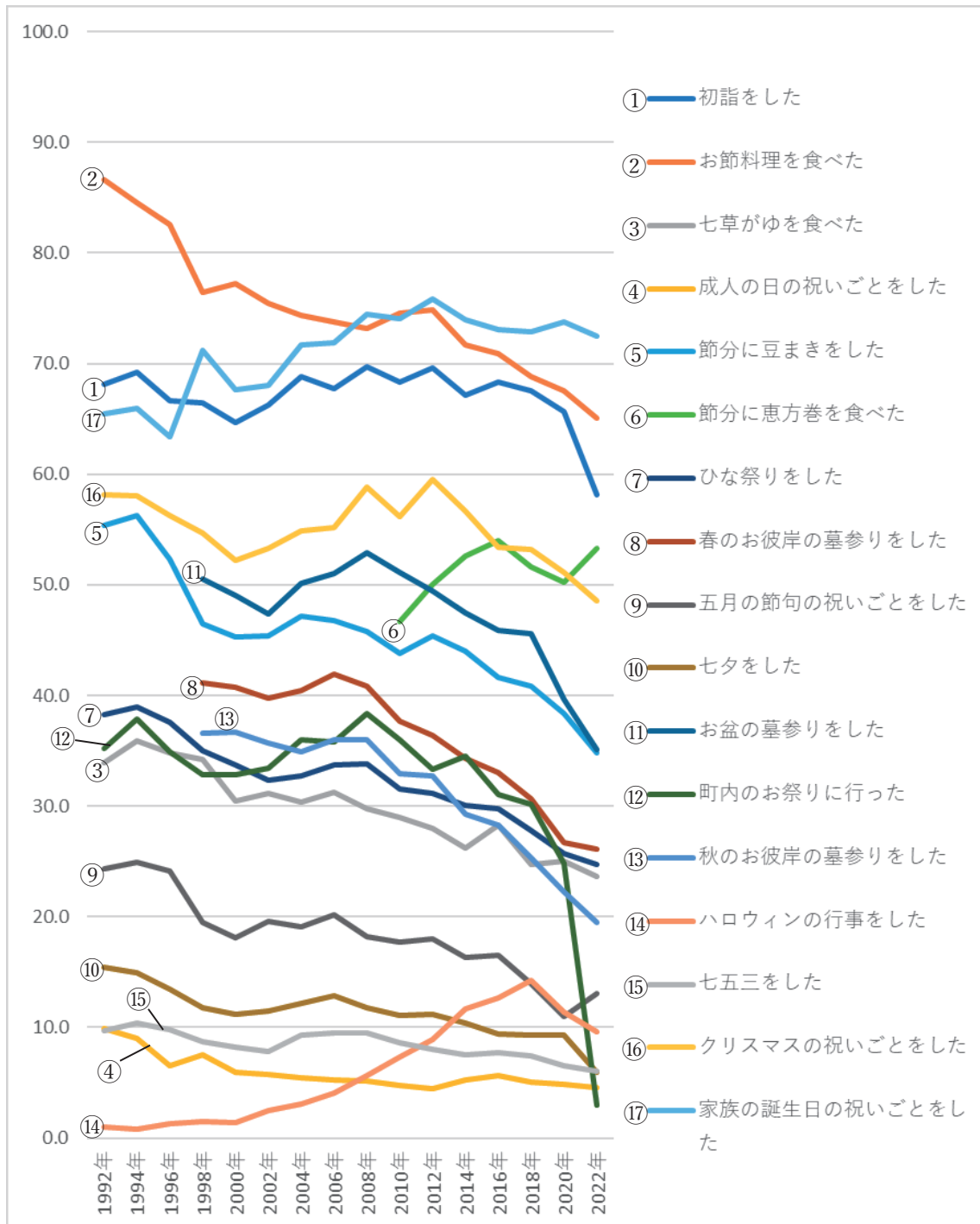
この調査には、「1 年以内にした年中行事は何ですか？」という項目で、39 の年中行事が示されている（図表 8）。「紅葉狩りに出かける」「学校の展覧会・学会会・文化祭」といった実施率の低い項目を除いて、典型的な年中行事 17 行事をピックアップして変化を見ると図表 9 のようになる。

図表 8 1年以内にした年中行事（博報堂・定点観測より作成）

	1992年	1994年	1996年	1998年	2000年	2002年	2004年	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年	2018年	2020年	2022年
お正月のお飾りをした	61.7	60.3	58.5	55.7	56.2	55.2	56.4	54.5	56.0	54.5	53.2	49.4	49.3	46.9	46.4	43.1
初詣をした	66.1	69.2	66.6	66.4	64.7	66.2	68.8	67.7	69.7	66.3	69.6	67.1	68.3	67.5	65.7	58.1
お節料理を食べた	86.6	84.5	82.6	76.4	77.2	75.4	74.4	73.8	73.2	74.6	74.8	71.7	70.9	68.8	67.5	65.1
七草がゆを食べた	33.9	35.9	34.8	34.2	30.5	31.2	30.4	31.3	29.8	29.0	28.0	26.2	28.3	24.7	25.0	23.6
新年会をした				59.0	56.6	54.4	54.9	54.4	55.7	53.6	52.4	52.2	52.0	49.9	40.4	21.4
帰省した	22.4	23.9	26.4	27.8	27.2	28.1	29.6	29.3	30.5	31.7	32.5	32.0	31.9	31.8	30.2	24.8
成人の日の祝いごとをした	9.9	9.0	6.5	7.5	5.9	5.7	5.5	5.3	5.2	4.8	4.5	5.3	5.6	5.1	4.9	4.6
節分に豆まきをした	55.4	56.3	52.3	46.5	45.3	45.4	47.2	46.8	45.8	43.8	45.4	44.0	41.6	40.8	38.4	34.8
節分に恵方巻を食べた										46.7	50.0	52.6	54.0	51.6	50.2	53.3
ひな祭りをした	38.3	39.0	37.6	35.0	33.7	32.3	32.7	33.7	33.8	31.5	31.2	30.1	29.8	27.8	25.7	24.7
春のお彼岸の墓参りをした				41.1	40.7	39.8	40.4	41.9	40.8	37.7	36.4	34.3	33.0	30.7	26.7	26.1
お花見に出かけた	45.0	50.1	50.5	50.4	52.2	47.2	50.5	48.0	50.9	49.9	49.9	43.0	42.6	47.4	18.4	32.4
イースターの祝いごとをした	1.1	1.7	1.1	1.6	1.4	1.0	1.0	1.2	1.5	1.7	1.7	1.7	1.9	1.9	1.0	1.0
ゴールデンウィークに遊びに出かけた				41.7	43.7	46.1	42.9	43.5	43.4	46.0	42.8	41.2	40.9	42.8	9.0	39.5
五月の節句の祝いごとをした	24.3	24.9	24.1	19.5	18.1	19.6	19.1	20.2	18.2	17.7	18.0	16.3	16.5	14.0	11.0	13.1
しょうぶ湯に入った	28.9	30.0	27.3	27.6	23.7	25.4	24.9	23.8	22.5	19.8	20.3	18.3	17.8	15.1	15.1	13.3
衣がえをした				51.6	47.8	43.1	45.2	45.9	44.4	43.8	47.4	45.1	43.9	43.6	42.4	38.1
七夕をした	15.4	14.9	13.5	11.8	11.2	11.5	12.2	12.9	11.8	11.1	11.2	10.4	9.4	9.3	9.3	5.9
花火大会を行った				29.5	27.7	29.6	31.9	29.7	29.0	27.1	24.2	27.3	25.4	23.6	13.1	2.8
フェス（音楽フェス、野外フェスなど）を行った														9.9	6.0	5.7
オンラインのライブやイベントに参加した																10.9
お盆の墓参りをした				50.5	49.0	47.4	50.1	51.0	52.9	51.1	49.4	47.5	45.9	45.6	39.7	35.1
丑の日にうなぎを食べた	43.3	43.4	41.3	45.1	42.8	42.6	38.2	42.2	39.3	37.4	32.6	26.9	28.6	26.6	28.9	26.0
夏休みに旅行した				41.7	39.1	38.2	36.3	35.8	35.7	34.8	34.7	35.2	33.4	34.3	31.0	18.5
町内のお祭りを行った	35.2	37.9	34.9	32.8	32.8	33.4	36.0	35.8	38.4	36.0	33.3	34.5	31.1	30.2	24.8	3.0
お月見をした	11.2	10.7	11.5	10.0	10.2	8.6	9.0	8.9	8.3	7.0	9.7	9.3	9.2	9.3	7.1	7.8
敬老の日の祝いごとをした	18.7	18.1	17.4	15.9	15.5	14.6	14.7	15.5	14.7	13.5	13.8	14.3	12.5	12.6	11.1	9.5
秋のお彼岸の墓参りをした				36.6	36.7	35.7	34.9	36.0	36.0	32.9	32.7	29.3	29.3	25.3	22.3	19.5
ハロウィンの行事をした	1.0	0.8	1.3	1.5	1.4	2.5	3.1	4.1	5.6	7.3	8.9	11.7	12.7	14.2	11.4	9.6
紅葉狩りに出かけた	11.7	12.9	13.2	14.1	14.8	15.6	13.3	12.8	13.1	13.4	12.6	10.4	10.8	9.9	6.4	7.3
学校の運動会・体育祭を行った	33.7	35.3	33.4	31.5	32.1	33.3	35.6	36.6	36.6	37.7	40.8	36.8	36.1	36.0	30.9	19.8
学校の展覧会・学芸会・文化祭を行った	24.3	25.8	24.8	21.8	20.8	20.7	23.7	21.6	25.2	24.0	24.6	23.5	23.6	22.3	20.5	9.6
七五三をした	9.7	10.4	9.8	8.7	8.2	7.8	9.3	9.5	9.5	8.6	8.0	7.5	7.7	7.4	6.5	6.0
冬至の行事をした（ゆず湯に入ったなど）	35.3	40.1	36.9	32.4	34.8	34.8	33.0	31.6	34.3	31.9	32.5	29.0	30.1	26.5	23.9	23.9
クリスマスの祝いごとをした	58.1	58.0	56.3	54.7	52.2	53.3	54.9	55.2	58.8	56.2	59.5	56.7	53.4	53.2	51.1	48.6
忘年会をした	67.5	65.6	64.3	65.4	61.2	60.0	61.7	60.8	61.8	59.3	60.9	57.9	58.3	56.4	49.9	25.6
年末の大そぼうをした				68.5	64.9	64.9	62.7	62.7	63.6	61.3	62.5	58.5	57.6	56.1	54.9	47.7
大みそかに年越しそばを食べた	77.1	74.1	74.5	77.5	74.9	75.7	76.3	76.6	76.1	76.6	76.2	73.1	72.6	72.3	70.4	68.2
家族の誕生日の祝いごとをした	65.5	66.0	63.4	71.2	67.6	68.0	71.7	71.9	74.5	74.1	75.8	74.0	73.1	72.9	73.8	72.5



図表9 1年以内にした年中行事（17行事）（博報堂・定点観測より作成）



年中行事全体の傾向は実施率の「低下」である。近年は新型コロナウイルス感染症のために「初詣をした」「お盆の墓参りをした」「町内のお祭りに行った」など行動の自粛が求められたが、そもそも1992年以降、低下の傾向が存在していた。

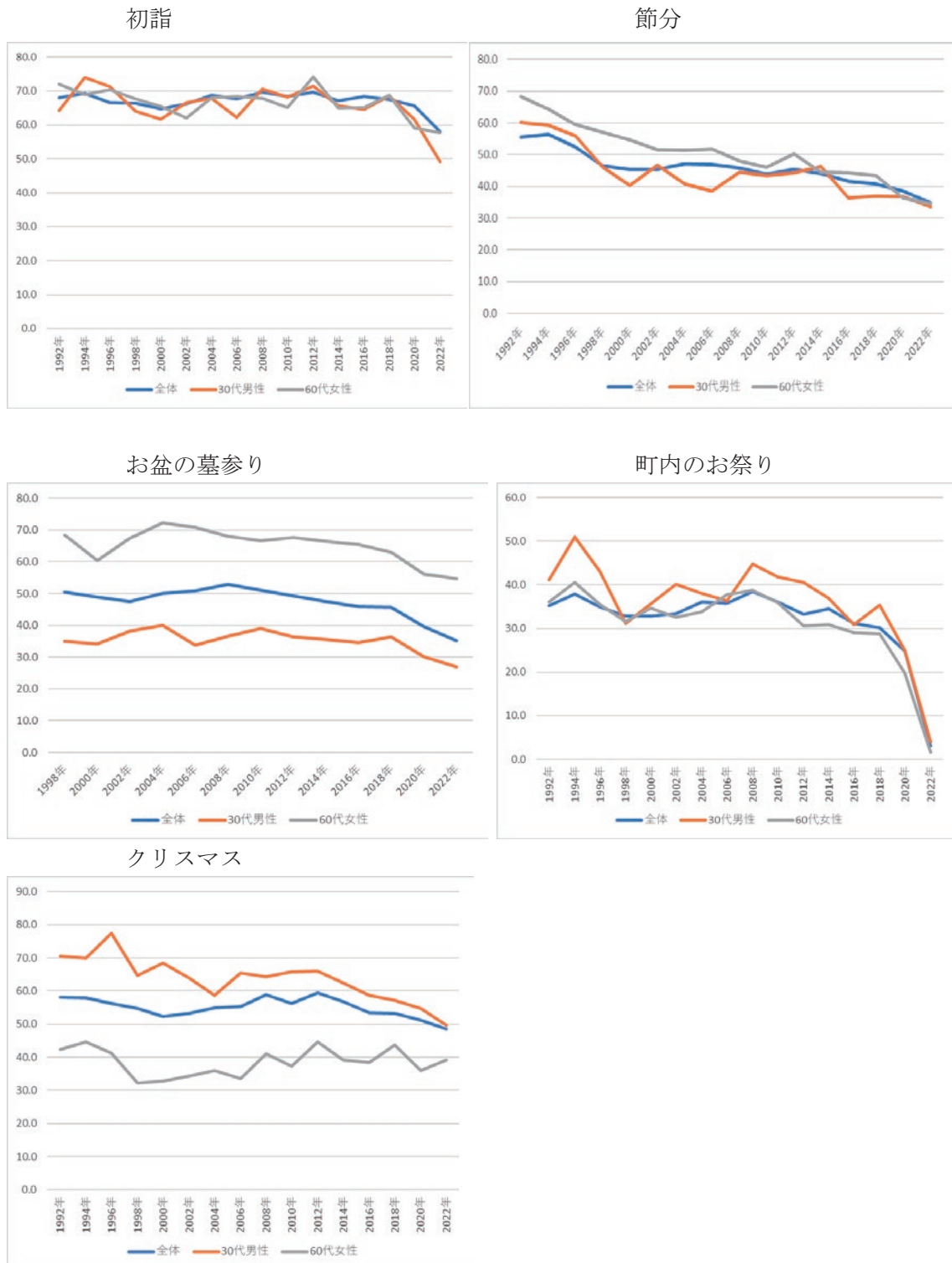
近年になって増加していた「ハロウィンの行事をした」「節分に恵方巻を食べた」であるが、ハロウィンは屋外の行事が中心であったためか低下した。他方で恵方巻は自宅での行事としてあまり変化は見られなかった。

とくに重要視しておきたいのは「祖先崇拝」に関わる行事の実施率の低下である。本論

の冒頭で竹田聰洲の論文を引用したが、日本人の宗教性の重要な一部であった祖先崇拝が近年希薄化傾向にあることは、こうした図表からも確認することができる。

年中行事の実施率が、都市部において低下していることを前提として、いくつかの行事の年齢別図表を作成すると次のようになる。それぞれの図表に3本の線が引かれているが、全体、単身者の多い30代男性、60代女性である。

図表 10 全体・30代男性・60代女性の行事実施率



5 行事について、単身者が多いであろう年代の調査結果を全体の結果を含めて図示したが、結果は微妙であった。先に述べたように、実施率の高い行事の変化を見たが、取り上げた5行事すべてで低下していた。「初詣」のように、これまで若年層で高く年齢が上昇するにつれて低下していった行事も、ほとんど同様の曲線となった。同じく、若年層で高い実施率が示される「クリスマス」も、近年は低下傾向にあり、逆に高齢者の中での変化が緩やかであるという結果は興味深いものだった。「お盆の墓参り」のように、高齢者によく見られる行為は、近年になって低下している。

### 3) インターワイアード「「季節行事・年中行事」に関するアンケート」

この調査はインターネットによるアンケート調査である。対象は DISMDRIVE モニター 8,197 人であるが、モニターがどのような属性を持っているか、どのように集めたのかは記載されておらず、正確な意味での信憑性に欠ける。ただ、次に示すように、目下必要としている調査結果が示されている。参考にはなると考える。

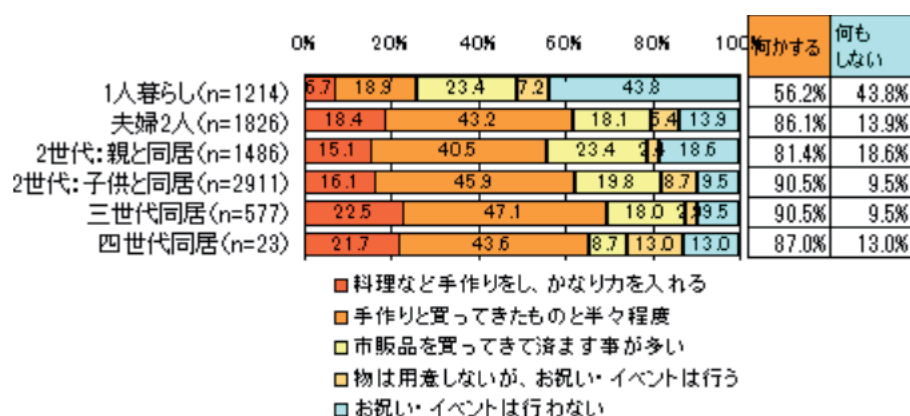
性別	N	%
男性	4780	58.3
女性	3417	41.7

年代	N	%
10代	38	0.5
20代	416	5.1
30代	1511	18.4
40代	2586	31.5
50代	2080	25.4
60代	1145	14.0
70代以上	421	5.1

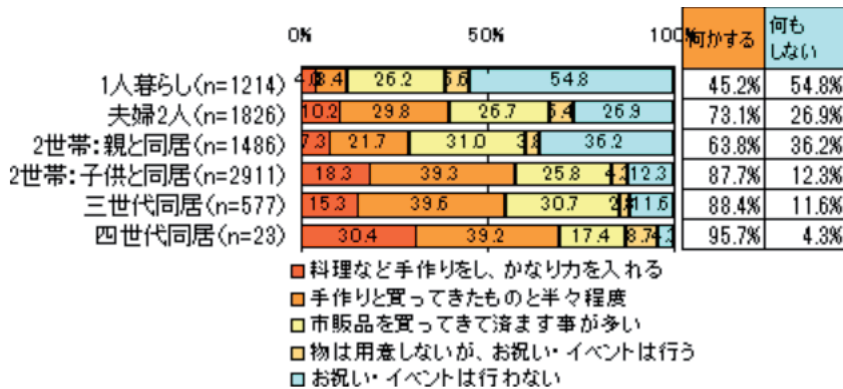
家族構成	N	%
1人暮らし	1214	14.8
夫婦2人	1826	22.3
2世代(親と同居)	1486	18.1
2世代(子供と同居)	2911	35.5
三世代同居	577	7.0
四世代同居	23	0.3
その他の構成	160	2.0

図表 11 「「季節行事・年中行事」に関するアンケート」基本的属性



図表 12 家族構成別の実施内容（正月行事）（インターワイアード）

図表 13 家族構成別の実施内容（クリスマス）（インタビューアード）



一覧表に列挙された行事は12だったが、家族構成別の結果が示されているのは「正月」「クリスマス」の2行事だけである。実施率からいって、正月とクリスマスは一般的に実施されている行事である。

調査結果で示された顕著な傾向は「1人暮らしは極端に儀礼の執行が少ない」である。正月でさえ43.8パーセントが、クリスマスでは半数を超える54.8パーセントが「何もしない」と答えている。他方で、正月では「2世帯：子供と同居」「三世帯同居」では90.5%と9割と実施率が高い。クリスマスも同様で、子どもが小学生まではイベント実施率は96%台と非常に高いが、中学生以上になると下がって84.1%となる。

「ハロウィン」は渋谷や六本木での様子が報道されることから、若者に実施率の高い行事と思われがちであるが、実際には低年齢の子どものいる家庭で行われている行事である。調査によれば、「2歳～小学校入学前の子供（幼児）」の家庭でもっとも行われており、42.4%となっている。女性では20代がもっとも高く30.5%、男性では30代で19.4%と高かった。ここでも男性の儀礼文化の実施率の低さが指摘されたことになる。

正月、クリスマスという全世代型の儀礼に対する実施率の低さは、他のより低い実施率の行事にも当てはまると考えられる。

現状から

なかなか統計上や研究からは単身者の儀礼文化の実体が明らかにならないので、「ぼっち」や「おひとりさま」といった単語を手がかりにして考察してみたいと思う。

まず若年層、といっても30代であるが、「ぼっち」の生活に関する著作をとりあげてみたい。「ぼっち」という表現は、ウィキペディアによると「「ひとりぼっち」の略。2010年頃からインターネットスラングとして出現」ということになる。「ぼっち」に関する著作を見ていくと、「ふたりぼっち」という表現がそれ以前から行われており、「ぼっち」をタイトルにしたマンガやライトノベルが2011年に刊行されている。今村朝希『ぼっち日和。。』（一迅社、2011年）、小岩井蓮二『キミはぼっちじゃない!』（メディアファクトリー）などである。2013年には波戸岡景太『ラノベのなかの現代日本 ポップ/ぼっち/ノスタルジア』（講談社現代新書）が刊行されているが、この時代の「ぼっち」を扱ったわけではなく、ライトノベルを通して個のあり方や家族を広く扱った文献である。

こうした状況の中で影響力を持ったのではないかと考えられるのが、朝井麻由美『「ぼ

っち」の歩き方』（PHP 研究所、2016 年）である。朝井はコラムニストの泉麻人の娘で、2014 年に「ソロ活の達人」という連載コラムをウェブメディアで始めた。当時 28 歳だった「ぼっち」を自称する著者が、これまでは鬻蹙を買ったり憚られたことを次々に実践していく様子が描かれている。「ひとりバーベキュー」「ひとりラブホテル」「ひとりスイカ割り」などであるが、「結婚しないけれど、ひとりでウェディングフェアに行ってみた」「リムジンのバースデープランを貸し切って「ひとり誕生日パーティー」を開いてきた」「ひとり二役で「ひとり豆まき」をしてみたら自分の中の鬼に出会った」という三項目が含まれている。



ひとりウェディング



ひとり豆まき

どの項目もペアや多人数を想定しているもので、果敢にひとりで挑戦してみた、という内容になっている。たとえば結婚式フェアにひとりで参加してウェディングドレスを着てみたとか、ひとりで豆を撒き、鬼になって撒かれたみた、というたわいのない内容である。「リムジンのバースデープランを貸し切って「ひとり誕生日パーティー」を開いてきた」は、誕生日使用のリムジンにひとりで乗って誕生日を自分で祝うという内容であるが、章のまとめでは「ひとりでパーティーして何が悪い」といった風である。儀礼の意義の確認や充実度はわからない。

朝井は『「ぼっち」の歩き方』刊行後もコラムを続け、2019 年に『ソロ活女子のススメ』（大和書房）を出版する。本を原案として、2021 年にテレビ東京系深夜ドラマ枠「ドラマ 25」でドラマ仕立てで放送された。出版社編集部の女性社員が退社後の「ソロ活」を邁進する内容となっている。2022 年にはシーズン 2 が放送されたので、それなりに注目されたと考えていいのではないだろうか。

『ソロ活女子のススメ』も前作と同様に、ひとりではできないだろうとされてきたことに挑戦する形で進められるが、やはり年中行事が複数含まれている。「ひとりハロウィン」ではひとりでカボチャの飾り物を作り、渋谷のハロウィンの雑踏に紛れることができることを確認している。「ひとりクリスマス」では、ひとりでチキンを焼き飾り付けをする。そしてひとりのクリスマスが寂しいといわれる正体は「「クリスマスは誰かと一緒に過ごすもの」という刷り込み」によるものと結論している（同書、86～87 頁）。

どの行事でも、ひとりでもできることを確認しただけで、なんら意義や楽しさを確認するといったことは行われていない。

20 代から 30 代の女性をターゲットにしていると思われる『おひとりさま専用 Walker』

でも行事に関する記事は見当たらない。私が読んだのは2020年版と2021年版であるが、修行体験に関する記事は見られたものの、本論で問題にしているような儀礼文化への言及は見られなかった。

河野真希『ひとり暮らしの季節ごよみ』（祥伝社、2009年）のように、単身者の季節ごとの行事や過ごし方を提案する書籍も見られるが、現在まで版を重ねておらず、必ずしも共感を得られていないようだ。河野は暮らしスタイリスト・一人暮らしアドバイザー・料理家である。

森川暁子は読売新聞「シングルスタイル」の編集長で、50代後半である。森川は、投稿された記事を紹介する『読売新聞「シングルスタイル」編集長は、独身・ひとり暮らしのページをつくっています。』（中央公論新社、2020年）を刊行している。本論と関係するのは、第一章「年末年始」、第二章「ひなまつり」、第五章「ソロウェディング」の三章である。紙面に掲載された記事をまとめたものなので、森川の日常を描写したものではない。そのために、多様な年中行事の過ごし方が記されている。

正月については、紙面を要約したような森川による文章が「婦人公論.jp」に掲載されている。たいへん実情の雰囲気伝わる内容なので、さらに部分的にカットしながら以下に引用する。

高齢の母がいる大阪の実家に帰省するのをあきらめたので、正月は東京で、ひとりで過ごすことになった。言うまでもなく、新型コロナウイルスの感染を広げるのが怖いからだ。正月はガチでひとり。今年、そんなシングルは多いんじゃないだろうか。

・・・省略・・・

ひと昔前を思い起こしてみれば、ひとりで過ごしやすい世の中になったものだと思う。ひとり客向けの焼き肉店もあるし、「ひとりでカラオケ」という楽しみ方も広がった、女性ひとりで旅行に出かけても「何かあったんですか」などと不審がられたりはもう、しないだろう。「ひとりでいるのが好きなんです」と公言する人も珍しくなくなった。実際、未婚の人、単身で暮らす人が増えたのだから、当たり前といえば当たり前かもしれない。しかも、新型コロナウイルスの感染が広がり初めて（ママ）からというもの、どこでも人との距離を取ることを期待されるようになり、単独で行動する人が周りから浮かなくなった。

・・・省略・・・

ひとりに優しくなった世の中が、がぜん家族モードになるシーズンがある。年末年始だ。正月は家族で過ごす時間だ、と一般には考えられていて、ひとり者にとっては、少し難しい季節といえる。にわかに実家に合流して正月を迎えるシングルは少なくない。私もだいたい、そうしている。

実家に帰ったシングルの中には、久しぶりに家族の時間を存分に楽しむ人もいれば、子連れで帰ってくるほかのきょうだいに混じってちょっと据わりの悪い思いをしたり、「結婚しないの」と詰め寄られて困り果てたりする人もいる。

(<https://fujinkoron.jp/articles/-/7409?page=3>)

森川は、新聞社ならではあるが、シングルスタイルの読者に呼びかけて、2019年秋に

ひとり参加限定の「みんなで年越しナイト」というツアーを試みた。つまり「過ごし方に迷う人がいるのなら、いっそそういう人ばかりで集まって一緒に年越ししたらどうだろう」という思いつきである。

ツアーには18人が参加した。貸し切りバスで東京駅から高尾山へ向かい、会食と温泉を堪能した後、除夜の鐘を聞きながら薬王院の護摩修行を見学するというものだった。森川は、「ひとりなら（同行者がいないので）、だれに気兼ねするでもなく、自分の関心のみにもとづいて気になる場所に行ったり、集まりに飛び込んだりできる」ことに気づく。先に紹介した朝井麻由美と同じ発想である。そして依然としてコロナの影響下にあった2023年の正月、森川が考えていたのは「読書、DVD、模様替え、お絵かきソフトの練習、着付けの練習、凝った料理をする、今更だが日記を書き始める、散歩をする……。そして、年越しそばか、おとそぐらいは、実家とZOOMでつながろう」であった

(<https://fujinkoron.jp/articles/-/7409?page=3>)。

こうした正月の過ごし方がこれまで日本人が体験してきためでたさや生命力の更新の機会といかに異なるかを強調する前に、他の中高年ではどのように表現されているかを確認したいと思う。エッセイストの平野恵理子『五十八歳、山の家で猫と暮らす』（亜紀書房、2020年）は日々の暮らしの有様を書き綴ったものだが、儀礼文化には言及がない。お笑いタレントの野沢直子（60歳）の著書『老いてきたけど、まあ～いっか。』（ダイヤモンド社、2022年）もまた同様である。年中行事や通過儀礼が集団を前提に行われてきたことは指摘したが、彼女たちは従来の「家」という檻からもがきながら脱出しようとしているように、「家」や家族で行われてきた儀礼文化からも自由になろうとしているように見える。

最後に「おひとりさま」の生活状況を見ておきたいと思う。取り上げるのは多良美智子『87歳、古い団地で愉しむひとりの暮らし』（すばる舎、2022年）である。多良は87歳で、神奈川県の大塚でひとり暮らしをしている。以前は家族5人だったが、3人の子どもは独立し、7年前に夫を亡くした。孫の提案で多良のひとり暮らしの日常をyoutubeで流すことにしたが（Earthおばあちゃんねる）、再生回数160万回を超える映像もあった。

多良によると朝5時から夜10時までの日々のスケジュールはほぼ一定である（同書、96～97頁）。朝は起きたらすぐに仏壇の水を替えて手を合わせる。しかし、それ以外の行事らしいことは一切記入されていない。

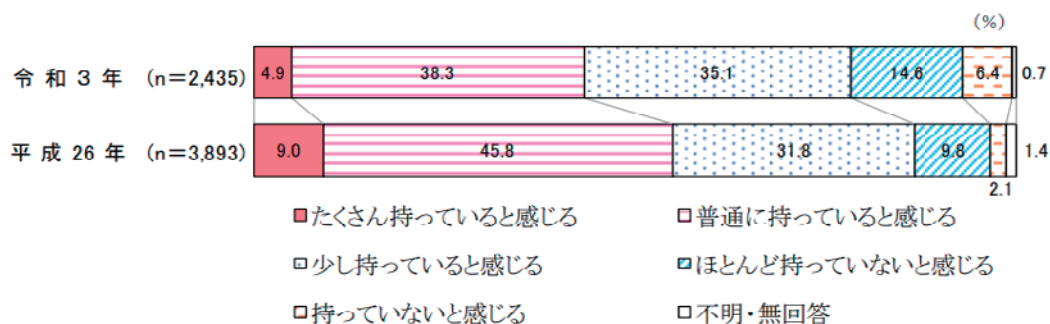
推測ではあるが、この年代でひとり暮らしになると、子どもや孫がいても頻繁に会うわけではなく、時間を自由に使うことを考えるようだ。体調がよい間は、友達と旅行やショッピングに行くことはあっても、ひとりでクリスマスやバレンタイン、ひな祭りや端午の節句を行うことはわずかである。ましてや体調や体力不足から自宅にいる時間が長くなると、こうした傾向は助長されるだろう。

おわりに

内閣府「令和3年度 高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」からふだん親しくしている友人・仲間の有無をみると、「普通に持っていると感じる」という回答が最も高く（38.3%）、「たくさん持っていると感じる」（4.9%）と「少し持っていると感じる」（35.1%）を合わせると、8割近くは友人・仲間を持っていると回答している。他方で、親しくしている友人・仲間を「持っていないと感じる（「持っていない」（6.4%）と

「ほとんど持っていない」（14.6%）」という回答者は、約2割である。ところで、この2割という回答率であるが、2014年調査と比較すると、倍近くになっている。ひとりぐらしの高齢者は、「近所付き合いがない」割合が18.1%、「相談したりする人はいない」の割合が14.6%となっている。

図表 14 親しくしている友人・仲間（令和3年度 高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査）



人は集団の中で生まれ落ちる。集団を前提にしてさまざまな儀礼文化が発達してきたことは明らかである。単身者はそうした文化から遠く、離れようとしている。かつて単身者で生活することは不可能もしくは極めて困難な時代があった。個人は「家」や地域社会の中で生涯を過ごすことを強いられた。戦後になって、そうした社会構造は大幅に崩れだし、核家族が中心の社会となり、現在は単身者として生計を立て生涯を過ごすことが可能となっている。勇敢な女性たちにより、従来の禁忌とされた生活様式に挑戦する者が現れるようになった。また、単身者として生涯を閉じる社会構造が生じた。こうした単身者は、明らかに増加しており、彼らの生活様式は奇異ではなく、ふつうの生活様式として受け入れられるようになっている。

しかしながらこうした人々が儀礼文化全般に無関心であるわけではなさそうである。正月やクリスマスを始め、日本社会全体が儀礼に染まる時期に、新しい形での参加の可能性がありそうである。

高齢者の増加と儀礼文化の維持はきわめて困難に見える。家族や親族との関わりがますます弱くなり、地域の人々や友人との交流が失われ、かつ高齢者の通過儀礼がほとんど存在しないために、儀礼文化は弱くなっていく。ケアセンターなどでどのような行事が実施されていて関心があるのか、調査が必要であるように思う。